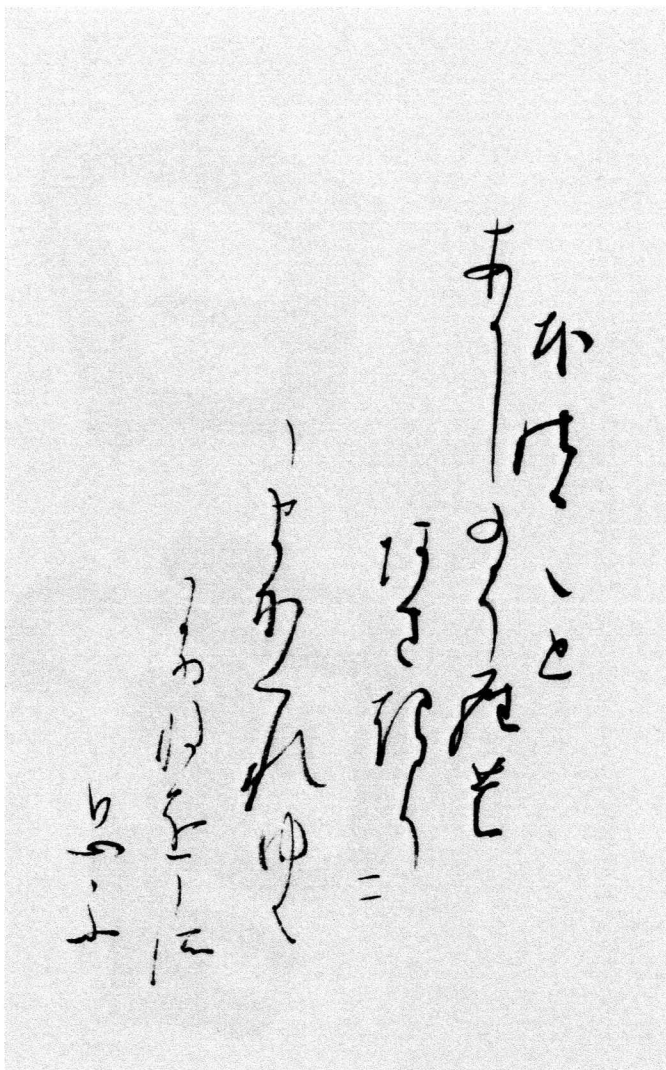


中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力 (一)

— 三十六歌仙 —

ほのぼのとあかしのうらの朝ざりに島かくれゆく舟をしぞおもふ

柿本人麻呂
かきのもとのひとまろ



中谷春径先生提供 (折帖)

〈歌意〉

ほのぼのと明けゆく明石の浦の朝霧の中を、漕ぎはなれつつ島に隠れてゆく舟、その舟の行方を見送りつつ、しみじみと身にしみる旅情である。この歌は「古今集・四〇九」に出ています。

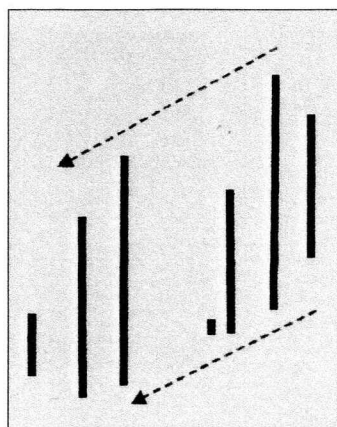
〈三十六歌仙〉

三十六歌仙は、藤原公任が平安時代の歌人の中から選んだ三十六人を指します。

〈柿本人麻呂〉

生没年未詳。万葉集の代表的な歌人。宮廷歌人として皇室を賛美した歌が多い。三十六歌仙の一人。持統・文武両天皇に仕え、石見国(現・島根県)で没したともいわれている。後に「歌聖」と称せられた。

〈線の構成〉



〈字母〉

ほのぼの
本能、と

あかしのう羅農

阿さ起り

二に

しまかくれゆく

布ねをし所

思ふ

中村素堂先生の論述「汲古一心」を受けて、今月号から素堂先生の魅力満載の「三十六歌仙の散らし書き」を、中谷春径先生の所蔵の折帖を通して一緒に学びたいと思います。

(中村青藍)